

2024年度（第38回）

# 日本鳥類標識協会大会 東京大会

東京農業大学 世田谷キャンパス



**2024.11.23-24**

主催：日本鳥類標識協会

共催：（公財）山階鳥類研究所

後援：環境省生物多様性センター

## ご挨拶

日本で初めて鳥類標識調査が行われたのは、今からちょうど100年前の1924年。現在の羽田空港の中にあった黒田侯爵家の鴨場で、農商務省の内田清之助（1884－1975）がゴイサギの雛100羽に足環を装着したのが始まりです。その後100年間、戦争による一時中断はあったものの、日本の鳥類標識調査は粛々と実施され続けてきました。山階鳥類研究所が調査を受託し始めた1961年以降、2022年までの62年間の累計で651万4,582羽（504種）が標識放鳥され、4万4,462羽（272種）が回収されています。この素晴らしい実績は、ひとえに全国のバンダーの皆様、標識調査にご理解いただいている皆様のご協力の賜物です。この場をお借りして御礼申し上げます。さて、この100年の標識調査でどんなことがわかってきたのでしょうか？そして、次の100年に向けて、標識調査をどのように発展させていけばよいのでしょうか。今回はこの問いに挑むべく、標識大会とあわせて、100周年記念シンポジウムを山階鳥類研究所と鳥類標識協会の共催で企画しました。東アジアの鳥類の渡りについて精力的に研究されているドイツ・オルデンブルク大学のWieland Heim氏を迎え、国内の研究者4名（青木大輔氏、安藤温子氏、大河原恭祐氏、澤祐介氏）の発表も加えて、今後の標識調査の可能性について考える機会としたいと思います。皆様とともに、標識調査の未来を語ることを楽しみにしています。

2024年度日本鳥類標識協会大会事務局  
実行委員長 水田 拓

## 大会日程・会場案内

### 11月23日(土)

12:00-17:00 公開シンポジウム

12:00 開場

13:00-13:05 開会挨拶 (山階鳥類研究所 小川博)

13:05-13:10 趣旨説明 (山階鳥類研究所 水田拓)

13:10-14:00 基調講演 (オルデンブルク大学 ウィーランド・ハイム)

変わりゆく世界で鳥類の生態を調べる—鳥類標識調査データの価値—

14:00-14:25 講演 (森林総合研究所 青木大輔)

蓄積された100年データの活用

—バイオロギング時代に鳥類標識調査が果たす役割—

14:25-14:35 休憩

14:35-15:00 講演 (国立環境研究所 安藤温子)

カラスバトによる島移動の謎に迫る

15:00-15:25 講演 (金沢大学 大河原恭祐)

何が分かる？鳥袋：標識調査を利用した鳥類生態の研究

15:25-15:50 講演 (山階鳥類研究所 澤祐介)

日本で越冬するユリカモメの渡りを読み解く

—標識調査とその応用研究から—

15:50-16:05 休憩

16:05-16:55 総合討論

16:55-17:00 閉会挨拶 (山階鳥類研究所 尾崎清明)

18:00~20:00 懇親会 (東京農業大学構内)

## 11月24日(日)

- 9:00-12:00 一般講演 (質疑を入れて1題12分)
1. 静岡県西部地域におけるクロジ越冬群の、標高差によるある傾向について  
北川捷康
  2. 次の100年を見据えて ～換羽や年齢の新しい記録方法について～  
細谷 淳
  3. 京都府舞鶴市冠島のオオミズナギドリ繁殖地天然記念物指定から100周年  
—鳥類標識調査の50年—  
須川 恒
  4. 富士山研におけるバンディングとバードストライクの実態  
水村春香
  5. 外来鳥類ガビチョウの捕獲手法および性別・年齢の判定について  
田谷昌仁
  6. ヒクイナの性齢の識別について  
大槻恒介
  7. 研究者と共同調査をやってみた カッコウ編  
深井宣男・飯田知彦・渡辺伸一・青木大輔・吉田邦雄
  8. ジョウビタキ国内繁殖個体へのカラーリング装着による追跡調査の試み  
米山富和・西 教生
  9. ケリの幼鳥はどうやって独り立ちするの? —GPSと足環による併用追跡—  
脇坂啓子・脇坂英弥
  10. 繁殖期後のケリ成鳥の移動および利用環境—GPSと足環を併用した追跡から  
脇坂英弥・脇坂啓子
  11. モンゴル東部における標識調査で捕獲された鳥類の識別ノート  
小田谷嘉弥・仲村 昇・尾崎清明
  12. モンゴル西部のバンディング調査に参加して  
鳥飼久裕・尾崎清明・渡久地豊・古園由香
  13. Genoscape – a methodology to unite flyway-scale bird ringing efforts on migration  
connectivity research  
Tianhao Zhao
  14. 東アジアにおける鳥類標識調査の交流  
尾崎清明
- 12:00-13:00 総会
- 13:15 写真撮影・閉会

## 会場

東京農業大学世田谷キャンパス 農大アカデミアセンター 横井講堂  
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1

### 小田急小田原線

経堂駅 徒歩約 15 分

千歳船橋駅 徒歩約 15 分

バス 約 5 分 (千歳船橋駅～農大前)

東急バス：渋谷駅行 (渋 23)または用賀駅行 (用 01)

### 東急田園都市線

用賀駅 徒歩約 20 分

バス 約 10 分 (用賀～農大前)

東急バス：祖師谷大蔵駅行 (用 01)または渋谷駅行 (渋 22)

### JR 山手線

渋谷駅 (西口) よりバス約 30 分 (渋谷駅～農大前)

小田急バス：調布駅南口行 (渋 26)

東急バス：成城学園前駅西口行 (渋 24)、用賀行 (渋 22) または祖師ヶ谷大蔵駅行 (渋 23)

## 足環をつけた鳥が教えてくれること—鳥類標識調査のこれまでとこれから—

主催：公益財団法人山階鳥類研究所・日本鳥類標識協会

後援：環境省生物多様性センター

鳥類に足環などの目印をつけて放し、追跡する鳥類標識調査。日本で初めてこの調査が行われたのは今からちょうど 100 年前のことでした。以来、何度の中断はあったものの、日本の鳥類標識調査は粛々と実施され続けてきました。この 100 年間の継続でどんなことがわかってきたのでしょうか？ そして、次の 100 年に向けてどんな発展が期待できるのでしょうか？ 本シンポジウムでは、国内外の研究者を招いてこの問いに挑みます。

### 基調講演：変わりゆく世界で鳥類の生態を調べる—鳥類標識調査データの価値—

鳥類は、気候変動や生息地の破壊、攪乱、汚染など人為的な活動に敏感に応答する。標識調査は、鳥類の生態を調べるうえで貴重なデータを提供し、鳥類への人為的影響を把握し予測するのに有効である。アジアで最多の蓄積を誇る日本の標識調査データは、鳥類の季節的な分布や変動、行動、生息地利用、生存率などの予測に活用することができる。本講演では、このデータが東アジアの陸鳥類の生態の理解にどのように役立つか紹介する。また、先進的な追跡技術を用いたプロジェクトにも基礎的な標識調査が有効であることや、調査時に採取できる羽毛や糞などの試料がもつ可能性も強調したい。アジア全域でより広範な標識調査ネットワークが確立され、多くのバンダーが率先し連携して科学的課題に取り組むことは、人為的变化に対する鳥類の応答についての理解を深めるために不可欠であり、今後数十年間は特に優先されるべきである。

**オルデンブルク大学・Wieland Heim (ウィーランド・ハイム)**：渡り鳥について調査する生態学者・鳥類学者。自然環境保全に根ざした研究を行い、鳥類に対する人為的な影響について調べている。アジアで 10 年以上研究活動を行い、極東ロシアでは鳥類標識ステーションの設立にも携わった。旧北区東部に生息する鳥類の渡り経路の解明に大きく貢献している。現在は、ドイツ・オルデンブルク大学の渡り鳥生態研究グループの一員として、農薬が鳥類の渡りに与える影響も研究している。

### 講演：蓄積された 100 年データの活用—バイオロギング時代に鳥類標識調査が果たす役割—

標識調査は、いつ、どこを鳥類が移動しているかのデータの蓄積に貢献し、鳥類の渡り研究の基盤を作ってきた。一方、近年は機械によって移動を直接追跡する手法が発展したことで、鳥類標識調査の役割の再定義が迫られている。鳥類標識調査の長年の蓄積を「ビッグデータ」として再認識し、膨大なデータを処理・分析できる「データサイエンス」の手法を活かすことが重要である。日本の鳥類標識調査データの活用のこれまでを振り返りながら、海外の動向も踏まえた今後の活躍の道筋を考えたい。

森林総合研究所・青木大輔（あおき だいすけ）：1993年大阪府生まれ。中学・高校をベルギーで過ごした。北海道大学大学院理学院博士課程修了。博士（理学）。現在、森林総合研究所・任期付研究員。研究テーマは鳥類の分布や渡りの進化の歴史を紐解く生物地理学。日本列島のユニークな環境を活かし、遺伝解析やバイオロギングなど多様な手法を統合して研究を進めている。

#### 講演：カラスバトによる島移動の謎に迫る

島嶼に生息する鳥類は飛行能力が低下すると考えられているが、カラスバトは隔離された離島の生息地において高い飛行能力を維持し、様々な時空間的スケールで島々を飛び回っている。このような島間の移動は、カラスバトを含む複数の島嶼生ハト目で報告されているが、詳細な調査はほとんど行われてこなかった。本講演では、これまでの研究で明らかになったカラスバトの移動パターンと、島嶼生態系における役割について紹介する。

国立環境研究所・安藤温子（あんど う はるこ）：京都大学大学院農学研究科で博士号を取得し、現在国立環境研究所に勤務している。小笠原諸島や伊豆諸島、スペインの離島などにおいて、鳥類の移動に関連した島嶼進化、生態系機能、保全に関する研究を行ってきた。国立環境研究所や青ヶ島での標識調査も行っている。

#### 講演：何がみつかると？鳥袋：標識調査を利用した鳥類生態の研究

鳥類標識調査では多くの鳥を捕獲、直接手にする作業がある。そのため普段はなかなか触れない鳥から貴重なデータを得ることが可能である。また捕獲した鳥を保管しておく布製の袋、いわゆる鳥袋の中にも鳥が残した様々な情報が入っている。福井県越前町の織田山一級ステーションでは毎年大規模な標識調査が行われているが、本講演ではその内容を紹介しつつ、その調査を利用した渡り鳥の種子散布と奇妙な蟻浴行動の研究について発表する。

金沢大学・大河原恭祐（おおかわら きょうすけ）：埼玉県出身。北海道大学博士課程卒業。金沢大学生命理工学類生態学研究室・准教授。アリや鳥を材料とした行動生態学、群集生態学、保全生態学が専門。アリではウメマツアリ属の特殊な社会性について、鳥では渡り鳥による種子散布や鳥類の蟻浴による疾患予防行動などについて研究している。

#### 講演：日本で越冬するユリカモメの渡りを読み解く—標識調査とその応用研究から—

ユリカモメは、1970年代にロシア・カムチャツカ半島の繁殖地で標識された個体が大阪で見つかったことをきっかけに、関西を中心に精力的に標識調査が行われてきた。私は、日本で越冬するユリカモメの渡りルートに違いがないか、東京と福岡で標識調査を行ってきた。その結果、東京と福岡では渡りルートだけでなく、体の大きさも異なる別の集団であることがわかってきた。講演ではさらに、発信器調査、ロシアの博物館での標本調査の結果を交え、日本で越冬するユリカモメの全体像についてお話ししたい。

山階鳥類研究所・澤祐介（さわ ゆうすけ）：2010 年より鳥類標識調査に参加。自身が東京で標識したユリカモメがロシア・カムチャツカで見つかったことをきっかけに、ロシアで繁殖する鳥類に強い興味を抱く。現在はユリカモメの他、コクガンを中心としたガン類の渡りルートを調べる研究を行っている。2020 年より山階鳥類研究所の研究員に着任。



## 講演要旨集(一般講演)

1. 静岡県西部地域におけるクロジ越冬群の、標高差によるある傾向について  
北川捷康
2. 次の 100 年を見据えて ～換羽や年齢の新しい記録方法について～  
細谷 淳
3. 京都府舞鶴市冠島のオオミズナギドリ繁殖地天然記念物指定から 100 周年  
一鳥類標識調査の 50 年  
須川 恒
4. 富士山研におけるバンディングとバードストライクの実態  
水村春香
5. 外来鳥類ガビチョウの捕獲手法および性別・年齢の判定について  
田谷昌仁
6. ヒクイナの性齢の識別について  
大槻恒介
7. 研究者と共同調査をやってみた カッコウ編  
深井宣男・飯田知彦・渡辺伸一・青木大輔・吉田邦雄
8. ジョウビタキ国内繁殖個体へのカラーリング装着による追跡調査の試み  
米山富和・西 教生
9. ケリの幼鳥はどうやって独り立ちするの? —GPS と足環による併用追跡—  
脇坂啓子・脇坂英弥
10. 繁殖期後のケリ成鳥の移動および利用環境 —GPS と足環を併用した追跡から  
脇坂英弥・脇坂啓子
11. モンゴル東部における標識調査で捕獲された鳥類の識別ノート  
小田谷嘉弥・仲村 昇・尾崎清明
12. モンゴル西部のバンディング調査に参加して  
鳥飼久裕・尾崎清明・渡久地豊・古園由香
13. Genoscape – a methodology to unite flyway-scale bird ringing efforts on migration connectivity research  
Tianhao Zhao
14. 東アジアにおける鳥類標識調査の交流  
尾崎清明

静岡県西部地域におけるクロジ越冬群の、標高差によるある傾向について  
○北川捷康(日本鳥類標識協会)

10余年前、草原から林に続く林縁には冬期多数の小鳥類が生息するので、経年調査を思い立った。しかし猛禽の往来が心配されたので林内の暗く下層植生がある場所に変更した。猛禽の心配はないが、2桁数標識種はクロジとソウシチョウに限られた。

2年ほど計測に慣れたところで、2020年から体重・自然翼長・全長等を計測し、その計測値で大小の判定ができるようになった。それを異なる越冬群ごとで比較したところ、標高による有意な差が認められた。なお、筆者はBIRDERを購読し、本屋が配達してくれていた。その本屋が廃業したので2年ほど空白ができ、その間に載っていた梶田氏のクロジの嘴高に関する報文については、計測開始後に鳥友の武田さんに教えていただいた。

計測の最後に嘴高を一項追加した。他の部位の計測値と比較すると同じ大小を指すのは当たり前であるが、時に逆を指すこともある。長年亜種やシノニム等の議論を経てきた本種らしく計測値がバリエーションに富むのは楽しい。

## 次の100年を見据えて ～換羽や年齢の新しい記録方法について～ ○細谷 淳

標識調査において年齢を識別・記録することは、寿命、生存率、繁殖成功率など保全やその他の研究の基礎的情報として欠かせない。鳥の年齢は主に外見、特に羽衣の状態によって識別記録され、日本標識調査ではA(成鳥)、J(幼鳥)、1W(第一回冬羽)、1S(第一回夏羽)などと記録をする。Jは標識マニュアルでは幼鳥または孵化後1年未満の個体と定義されており、Jと1W/1Sの選択が任意なため正確なデモグラフィの把握が困難である。また夏羽・冬羽など季節と関連した名称を使うと、季節が逆になる南半球の研究者と同じ用語が使えず、生殖羽のように繁殖と関連づけた名前を使用すると換羽の相同性と一貫性が保てず好ましくない。年齢を正しく記録するため、欧州や北米では暦年(カレンダーイヤー)で年齢を記録するが、年を跨ぐ期間に繁殖する鳥や繁殖サイクルが一年未満の種や季節に関係なく繁殖する熱帯の鳥への適用が困難である。

換羽の進化的視点から、これらの名称を整理した用語体系が71年前の1953年にHumphreyとParkesによって提案された。これは爬虫類の脱皮と相同である定期的な全身換羽をBasic Plumage(基羽)とし、それに対し主に部分換羽で作られる羽衣をAlternate Plumage(代羽)とするものである。その後Howellにより相同性についてより良い説明をするため、生まれてから最初に全身にまとう正羽(幼羽)を第一回目の基羽とし、その後2回目のサイクルの前に種によって獲得される最初の特別な羽衣をFormative(発達羽)と呼ぶ修正版が提案された(Howell 2003)。

さらに熱帯地域の鳥類の年齢を記録する必要性から、このHPシステムを使用して年齢と羽衣を同時に記すことを可能にするWRPという方法が提案され、これが熱帯のみならず世界中の全種類に適用可能であることが示された(Wolfe et al 2010)。WRPシステムは、換羽の状態を3文字で記録し、最初の文字を換羽サイクル、二つ目を換羽中か否か、三番目をBasicやAlternateなどの羽衣の種類を記録することを基本にしている。現在このWRPシステムは南北アメリカ大陸やオーストラリアを中心に広く使われ始め、北米の鳥類標識調査プログラム、MAPS、MoSI、eBird、Birds of the World等で採用が検討されている。また北米バンダーであれば必須の識別マニュアルであるPyle(1997)も次のバージョンからこのWRPを使うことになっている(Pyle et al 2022)。WRPシステムは温帯地域に限らず世界中で、どんな繁殖サイクルの鳥でも、新年を跨ぐ繁殖をする種でも同じように簡素に記録することができ、重要な情報が失われることもない。

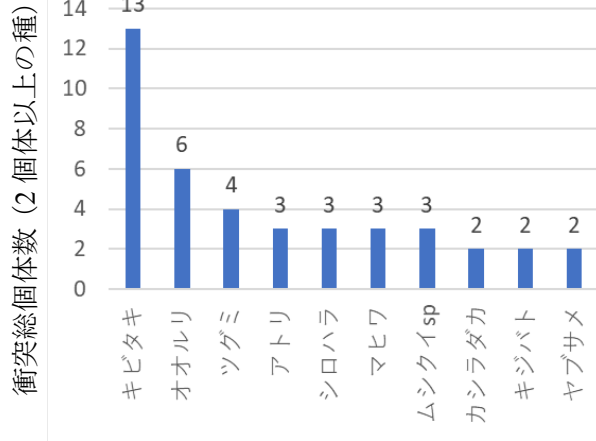
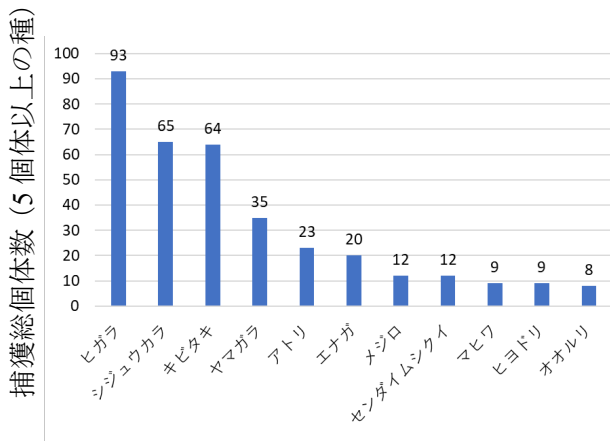
科学は、人類が獲得してきた知見の積み重ねによって発展を遂げてきた。その基盤となるのが、世代や地域を超えた知識の蓄積とコミュニケーションである。コミュニケーションは科学の発展において本質的な役割を果たしており、特に現象や概念を正確に共有するための用語体系の整備が不可欠である。特定の地域の季節やライフサイクルに基づく従来の用語体系に固執することは、鳥類学の更なる発展を妨げかねない。南北アメリカ大陸で普及しつつあるHP・WRPシステムは、この地域の鳥類学研究を大きく加速させると予測される一方、欧州や日本ではこの新しい用語体系の導入が遅れており、国際的な研究競争の観点、あるいは科学に対するより良い貢献という点で早急な対応が求められる。発表者は100周年の節目に、この新しい用語体系の採用を日本の鳥類標識の次なる100年への一歩として提案したい。

京都府舞鶴市冠島のオオミズナギドリ繁殖地天然記念物指定から 100 周年  
—鳥類標識調査の 50 年  
○須川 恒(京都・冠島調査研究会)

- (1) 今年は鳥学者内田清之助が鳥類標識調査を開始後 100 周年である。実は同じ内田が京都府舞鶴市沖にある冠島をオオミズナギドリの集団繁殖地として天然記念物指定の際(1924 年)に貢献している。だが当時の標識技術(金属足環の質)ではオオミズナギドリの標識調査は難しく、実質的な調査は 1973 年にモネル合金のリングが利用されてからである。1989 年以降はインコロイ合金となり、モネル合金(20 年くらいで脱落することがある)のリングとの付け替えをやったおかげで、36 年 8 ヶ月という日本における標識調査最長寿記録が冠島発で得られた。
- (2) この講演では、まず内田清之助が冠島を天然記念物指定した経緯を紹介する。通常天然記念物指定は現地調査の報告書に基づき指定されるが、内田の報告書は残っていない。1923 年 9 月 1 日の関東大震災では少数部数の報告書の多くは焼失したことが知られている。この報告書は得られなかったが、同じく内田の高知県の蒲葵(びろう)島についての報告書で彼の海鳥繁殖地保護の姿勢を知ることができる。
- (3) 1970 年代から 50 年間の標識調査で大きいのは海上自衛隊舞鶴地方隊による継続的輸送支援である。300 トンの船が春夏 2 回、日帰り 30 名・3 泊 4 日のキャンプ宿泊者 20 名の輸送支援を継続してきた。バンダーはもちろん高校生や大学生、環境省近畿地方環境事務所職員が、オオミズナギドリの捕獲許可を得て研修の場ともなってきた(小鳥類を扱うのはバンダーのみ)。また多くの冠島に関係する諸機関の交流の機会としても貴重であった。このような体制の継続があれば数年後に最長寿記録の更新も期待できる。
- (4) 今後の 50 年、100 年を考える上で大切なのは、渡り性動物保護の国際環境条約であるボン条約への日本の加盟と、特にボン条約と連携しているミズナギドリ類に特化した多国間協定へ参加して総合的に保護・普及啓発を考えることである。
- (5) この報告の詳細は ALULA No.69(2024 年秋号):41-64. に掲載する。

## 富士山研におけるバンディングとバードストライクの実態 ○水村春香(山梨県富士山科学研究所)

窓ガラスや飛行機などの人工物へ鳥が衝突するバードストライクは、北米だけで年間10億羽以上もの鳥の死因となっている重大な社会的課題である。一方、国内におけるその状況について、特に窓ガラスへの衝突は情報が乏しい。山梨県富士山科学研究所（以下富士山研）では、開設当初から窓ガラスへの鳥衝突（バードストライク）が頻繁に起きており、死体が保存されている場合があった。そこで本報告では、昨年より本格的に開始した富士山研におけるバードストライク情報収集調査の状況を報告するとともに、昨年11月より開始した同所での定期的なバンディングの結果を概説し、バードストライクしやすい種、季節的な変動、齢、性による傾向を報告する。



## 外来鳥類ガビチョウの捕獲手法および性別・年齢の判定について ○田谷昌仁(東北大学大学院生命科学研究科)

外来鳥類の生態や分布の実態を把握し、分布拡大を可能にする進化生態学的な機構を解明することを目的として、発表者はガビチョウ *Garrulax canorus* を対象にした標識調査を 2022 年から継続している。これまでに東北・関東・東海・九州地方の合計 9 地点で調査を行い、徐々に捕獲方法や性別・年齢の判定に関する情報が蓄積されてきた。

捕獲方法については、本種には 1 年を通じて音声誘引が有効で、複数個体または複数種のさえずりを混ぜることでよりその効果が増強されることや、デコイを使った視覚的な誘引も有効であることがわかってきた。しかし、誘引の効果は地域によって異なる可能性があり、東日本と九州地方に広く分布する本種を効率よく捕獲するにはさらなる工夫が必要と考えられる。また、かすみ網の上部が樹木や植生で覆われていると、それをつたってかすみ網を避けてしまうため、網を設置する場所についても工夫が必要であることもわかってきた。

年齢および羽衣の識別については、juvenile plumage は頭頂部の縦斑の色が薄く、風切羽の羽軸の色も薄い茶色であるのに対し、formative plumage や definitive plumage は頭部の縦斑の色が濃く、風切羽の羽軸の色が黒色であるという違いがあるようだった。Basic plumage と alternate plumage の区別については明確な傾向を見出せなかった。性の識別については、現在 DNA を用いた性判定が進行中であり、今後性別の判定に有効な形質が明らかになると期待される。

本発表では、捕獲手法および性別や年齢の判定に関するこれらの知見を共有するとともに、外来鳥類を用いた調査研究の意義について議論したい。



## ヒクイナの性齢の識別について 大槻恒介(長崎大学 大学院 水産・環境科学総合研究科)

ヒクイナは一般的に雌雄同色とされ、体サイズに性的二形が知られておらず、繁殖期でも抱卵斑や総排出孔の突出が見られないため、性の識別が困難である。また、虹彩色や羽色による年齢判別も越冬期以降は困難であり、成鳥との区別が難しい。そこで本発表では、これまで知られていなかった雨覆の羽色による性の識別方法を提唱し、さらに外部形態の計測値による識別の可能性についても検証した。また、年齢判別には、非スズメ目ではあまり利用されてこなかった頭骨の含気化の進行度を利用する方法についても検討した。

まず、性別が判明している個体（雄 18 羽、雌 17 羽）の雨覆に見られる赤い羽の程度を 4 段階に分けて記録し、雨覆の赤さに雌雄差があるかを Kruskal-Wallis 検定で確認した。その後、この指標を用いて捕獲した個体（雄 41 羽、雌 37 羽）について、各 8 部位の測定値の雌雄差をロジスティック回帰分析で検証した。さらに、頭骨の含気化に関しては、18 個体の頭骨を調査し、パターンとその時期について調べた。

結果、雨覆の赤さの程度に明らかな雌雄差が認められ ( $p < 0.001$ )、雌には赤斑のある羽がほとんど見られないのに対し、雄では前縁雨覆や小雨覆に広く赤色を呈し、個体によっては中雨覆や大雨覆にも赤斑が見られた。一方、外部形態の計測値には雌雄差が認められなかった。頭骨の含気化は図の通りに進行し、2cy の繁殖期までは年齢識別が可能である場合があることが示唆された。

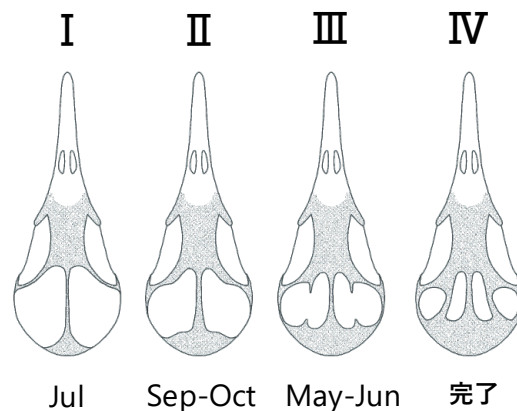


図. ヒクイナの含気化の進行パターン.

## 研究者と共同調査をやってみた カッコウ編

○深井宣男<sup>1</sup>・飯田知彦<sup>2</sup>・渡辺伸一<sup>2</sup>・青木大輔<sup>3</sup>・吉田邦雄<sup>1</sup>

(1: 日本鳥類標識協会、2: 日本希少鳥類研究所、3: 森林総合研究所)

渡りをはじめとする鳥類の行動解析には様々な手法が用いられてきたが、その中でも近年、大きな成果をあげているのがロガーによる個体追跡である。しかし、一般のボランティアバンダーがロガーを利用した研究を実施するには、技術的にも経済的にも大きな壁がある。昨年の標識協会のオンライン大会では、「君たちはどう標識るかー 標識調査の価値を高めるためにー」と題するシンポジウムが開催され、その中で、ロガーを用いた調査をめぐる、バンダーと研究者の協力体制の構築に向けた課題や連携の可能性が議論された。バンダーと研究者が、得意とする分野を相互補完的に協力することで、効率的により高度な調査研究を実施できるのではないかという構想である。この試みは各地で少しずつ実施されており、成果が得られはじめている。演者らは今年、栃木県の渡良瀬遊水地において、カッコウを対象とした共同調査を開始した。地元バンダーが、調査地への立入り許可の取得、捕獲用具の準備、調査地の整備などを、研究者がロガーの手配やプログラミング、装着の実施を分担することで、労力を軽減でき、限られた調査日数の中で、一定の成果を上げることができたと考える。ボランティアバンダーが研究者と連携して研究にあたることは、相互に大きなメリットがあることを実感できた。

今年の調査で捕獲できたカッコウは4羽で、研究テーマ(繁殖地での行動追跡と渡り経路の解明)に応じて3種類のデバイスを装着した(表1)。目的によって測位間隔を調整し、また機器の不調もあったため、追跡日数と得られた測位地点数が個体によって大きく異なった。限られた情報ではあったが、繁殖地での行動について、個体による行動圏の大きさの違いや、雌雄による行動パターンの違いなど、興味深い知見を得ることができた。また、捕獲個体の血液または羽毛サンプルから雌雄の判定をし、羽色による性の識別結果(図1)と照合する予定である。当日は、行動の具体的な個体差や、年齢の識別などについても紹介する。

表1 装着したデバイス

	性	年齢	機器	追跡期間	日数	測位地点数
個体A	♂	Ad	Ultra	5/25-6/01	8	37
個体B	♀	1S?	Ultra	5/25-7/30	66	444
個体C	♂	Ad	NANO	5/26-7/26	61	816
個体D	♂	Ad	MINI	6/22-8/04	29	29



図1 カッコウの雄(左列)と雌(右列)の比較



## ジョウビタキ国内繁殖個体へのカラーリング装着による追跡調査の試み ○米山富和・西 教生(長野県)

ジョウビタキは日本では冬鳥とされていたが近年日本各地で繁殖が確認されるようになっていく。長野県では2010年に富士見町で最初の繁殖が確認されたのち、継続的に繁殖が確認されるようになり、年を追うごとに繁殖例も多くなるにつれ分布域も拡大している。現在では県南の一部を除いてほぼ全域で繁殖が確認されるようになっていく。繁殖が確認され始めた当初は標高1000m前後の別荘地など人家がまばらにある場所が主であったが、最近では標高600m程度の市街地から2500m程度の亜高山帯まで記録がある。いままでに確認されている営巣場所はすべて人工物である。

これらの地域では高標高域を除いて冬にもジョウビタキが生息しているが、繁殖個体が残っているのか、冬鳥として渡ってきたものと入れ替わっているのかはわかっていない。鳥取県の大山では繁殖個体のカラーリングによる個体識別が行われており、繁殖地への同一個体の帰還が確認されているが、冬季にはジョウビタキが生息しない点で長野県の状況と異なっているようである。

今回の試みではジョウビタキの繁殖個体に個体識別を目的にカラーリングを装着し、繁殖地及び移動先での目撃情報などから、ジョウビタキの季節移動および繁殖地への帰還などの解明を期待し、2024年から調査を開始した。したがって現段階で追跡結果の成果は得られていない。ジョウビタキは人目に付きやすい鳥であることからバードウォッチャーなど一般からの情報にも期待したい。

ジョウビタキへのカラーリングの装着はすでに鳥取県の大山と岐阜県の高山市で行われているため、リングの組み合わせが重ならないように関係者と調整を行った。今後、準備が整い次第、鳥類標識協会のHPにも詳細を掲載する予定である。

2024年は調査地2カ所でオス4羽、メス1羽にカラーリングを装着した。

捕獲方法には様々な方法が考えられるが、今回は営巣場所近くにカスミ網を設置し、近くにデコイを置き、鳴き声による誘引を行った。鳴き声は囀りと警戒声の2種類を使用した。どちらもよく反応するものの、その時々で反応に違いがあった。繁殖期間中であることを考慮して、できるだけ短時間で作業を終えられるよう方法を検討したい。

発表を通して捕獲方法の検討、情報共有や、他地域で同様の取り組みが開始され、ジョウビタキの繁殖個体の生態解明につながることを期待したい。

## ケリの幼鳥はどうやって独り立ちするの？ —GPS と足環による併用追跡—

○脇坂啓子・脇坂英弥(関西ケリ研究会)

ケリの繁殖生態に関して、抱卵期や育雛期を中心に研究が進められている。しかしながら、本種の保全に重要な情報の1つである、“飛翔可能となった幼鳥が、いかに自立し、どこへ分散するか”は全く分かっていない。それらを明らかにするため、幼鳥(名称ラッキー)にGPSと足環をつけて追跡した。さらに、地域一帯の成鳥36羽と幼鳥49羽に足環標識をし、ラッキーを中心に家族間、群れ間の関係を観察した。本発表では、分散手前の自立の過程を報告する。

ラッキーがわずかに飛翔できる40日齢まで待つて安全に捕獲後、GPSを装着し環境省の金属足環と色足環をつけ個体識別をした。

GPS追跡の軌跡から行動圏の面積を測定した結果、41~48日齢(1期)1.4ha、49~56日齢(2期)2.6ha、57~64日齢(3期)7.8ha、65~72日齢(4期)97.2ha、73~80日齢(5期)82.9haであった(図)。足環追跡の結果、以下のイベントが観察された(表)。

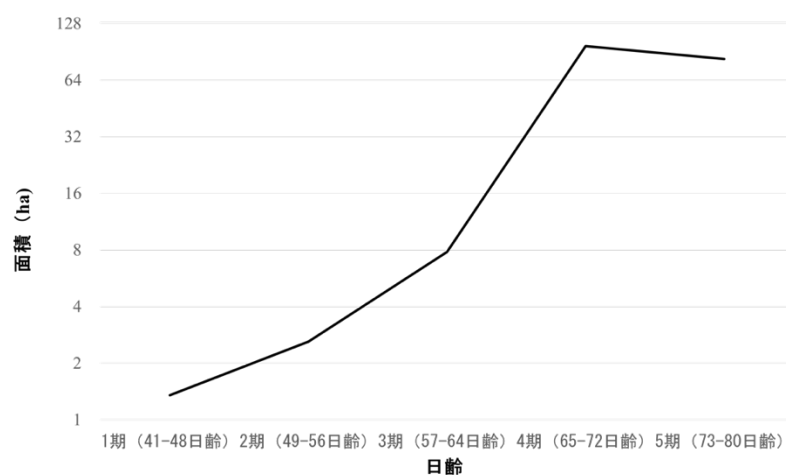


図) ラッキーの行動圏の変化

以上より、幼鳥ラッキーは、飛翔後徐々に、4週間弱で劇的に行動圏を広げることが分かった。それらの変化には、家族、近傍の家族および群れの動きが影響していることが推測された。現在、他のGPS装着幼鳥2個体を含め、分散状況を追っている。

### 表) ラッキーの行動変化

1期	親鳥の見張りのもと、わずかに飛翔。
2期	時々親鳥から離れて、縄張り内を飛翔。
3期	前半、父鳥と兄弟で近傍の家族Bの縄張りへ飛行。家族Bの幼鳥が家族Aの縄張りへ飛来。 後半、近隣の足環個体を含む10羽ほどが群れる家族Cの縄張りへ、単独もしくは家族で飛行。
4期	家族Aの縄張りで、近隣の足環個体を含む10羽ほどの群れを形成。
5期	前半、他の群れと離れて、家族Cの縄張りで幼鳥7羽と成鳥1羽の群れに加入。 後半、726m離れた木津川河川域で、親鳥とは別に、幼鳥5羽と成鳥4羽の群れに加入。

## 繁殖期後のケリ成鳥の移動および利用環境 —GPS と足環を併用した追跡から ○脇坂英弥・脇坂啓子(関西ケリ研究会)

日本でのケリ *Vanellus cinereus* の移動に関する報告は少なく（例えば、河地 2019、小丸ら 2024、脇坂ら 2019・2024 など）、繁殖個体群が非繁殖期にどこへ移動し、どのような環境を利用しているのか、といった知見は乏しい。我々は京都府南部の巨椋池干拓地（以降、巨椋）において、ケリの標識調査を続けている。2024 年の繁殖期には 85 羽を標識（金属足環、色足環）し、そのうち 6 羽に GPS 発信機を装着した。使用したのは、Druid 社の MINI 4G (6.2 g) 4 台、ULTRA 4G (2.1 g) 2 台である（体重の 4%以下）。本発表では、3 月 24 日放鳥のオス成鳥（右脚：黄白メタル、左脚：赤黄橙）の「はっちゃん」をとりあげ、繁殖期後の本個体の移動先と利用した環境について報告する。

2024 年の繁殖期に、はっちゃんは 3 回の営巣を試みたが、いずれも抱卵途中で失敗に終わった。原因は、捕食者および農業活動にともなう人為攪乱の影響であった。繁殖期以降、巨椋を離れた本個体は、木津川から淀川にいたる周辺の京都府八幡市（営巣地からの距離：約 3km）、長岡京市（約 5km）、大阪府島本町（約 6km）などの広い範囲で過ごすようになった（7 月 22 日～9 月 17 日までの 57 日間）。本個体が利用した環境は、水田のほか河川敷公園、ゴルフ場、野球場、競馬場などであった。9 月 22 日の日没後、野球場の芝生の生えた外野で、バッタ類を採餌する本個体が観察調査により確認された。この時期の稲刈前の水田は、背丈の高いイネが一面を覆うために餌場としては不向きで、むしろ芝生の広がる河川敷公園、ゴルフ場、野球場、競馬場などの方が餌場として利用しやすいものと考えられる。

その後の 9 月 18 日、本個体は突然、奈良県橿原市の農地へ移動した（営巣地からの距離：約 45km）。10 月 6 日、現地にて稲刈後の水田で群れとともに採餌する本個体を目撃した。しかもその群れ内には、本個体の縄張りから 2023 年に巣立った子が一緒にいることを、色足環から確認できた。

以上、移動先の意義や独立した子との関係などについて、今後の研究により明らかにしたい。

## モンゴル東部における標識調査で捕獲された鳥類の識別ノート

○小田谷嘉弥<sup>1</sup>・仲村 昇<sup>2</sup>・尾崎清明<sup>2</sup>

(1:千葉県立中央博物館 2:山階鳥類研究所)

2023年8月21日から29日の8日間、発表者3名はモンゴル東部の Khurkh Bird Ringing Station (48°16'N, 110°29'E) において実施されている鳥類標識調査に参加した。この調査の概要についてはバンダーニュース No.73 に詳しく報告した。今回の発表では、捕獲された鳥類の識別点を日本のバンダーと共有することを目的とする。

本調査の期間は同地における秋の渡りの初期にあたり、46種 1,048羽が新放鳥、286羽が再捕獲された。これらのうち、シベリアセンニュウ、アカモズ、オジロビタキ、コムシクイ、ヤナギムシクイ等の外部形態と、日本におけるそれぞれの類似種との識別について、気づいた点を報告する。これらに加え、コムシクイ、キマコムシクイ、ムジセッカ、コホオアカ、アリスイ、ハリオシギ等の秋期における性・年齢の識別についても、現地での経験を踏まえて共有したい。また、ノゴマ等について、国内の個体群との相違点についても紹介する。

今回の渡航の一部は、公益財団法人山階鳥類研究所が運営する山階武彦助成事業の助成を受けた。現地調査においては、WSSC (Wildlife Science and Conservation Center) の Tuvshinjargal Erdenechimeg さんをはじめとする現地の調査員にお世話になった。受け入れにあたっては WSSC の Nyambayar Batbayar さんと Batmunkh Davaasuren さんに調整をいただいた。これらの方々に深くお礼を申し上げます。

モンゴル西部のバンディング調査に参加して  
○鳥飼久裕<sup>1,4</sup>・尾崎清明<sup>2,4</sup>・渡久地豊<sup>3</sup>・古園由香<sup>4</sup>

(1:奄美野鳥の会、2:山階鳥類研究所、3:工房リュウキュウロビン、4:日本鳥類標識協会)

2024年8月20日から27日の7泊8日で、モンゴル西部のホブド・バード・リングング・ステーション (KBRS) で行われた標識調査に参加した。ホブドはウランバートルの約1400km西に位置するホブド県の県都であり、KBRSはそこから車で南東方向に1時間ほど進んだ場所に春と秋の調査期間中のみ設置されるゲルであった。一帯はケツペンの気候区分では砂漠気候にあたる乾燥地帯だが、KBRSはアルタイ山脈を水源とするツェンケリン川沿いにあり、その河畔林が網場となっていた。KBRSにはコーディネーターの Batbayasgalan Burenjargal (通称バヤサー) 以下モンゴル人スタッフ数名が駐在しており、広く外国からの調査員を受け入れていた。われわれが調査に参加した期間中にはデンマークとドイツからも調査員が加わっていた。

滞在中、29種類209羽の野鳥を放鳥した。放鳥数ではコノドジロムシクイ (71羽) が最も数が多く、以下モウコアカモズ (49羽)、ムナフビタキ (24羽)、アカマシコ (22羽) と続いた。地理的に中央アジアに近いユラシア大陸中西部に分布する鳥が多く、ヤブヨシキリ、ヒメウタイムシクイ、ノドグロツグミ、ヨーロッパビンズイなどの日本では記録の少ない迷鳥の他、ヨーロッパヨタカ、ヌマセンニュウ、シمامシクイなどヨーロッパ系の鳥も多かった。

KBRSではすべての鳥について、最大翼長、P8長、尾長、露出嘴峰長、跗蹠長、体重を計測し、脂肪量と筋肉量も記録していた。年齢は主として換羽状態をもとに判定し、頭骨の骨化度や虹彩色はほとんど考慮しないため、われわれからすれば少々違和感を覚える場面もあった。



網場のようす



コノドジロムシクイ



ヨーロッパビンズイ

## Genoscape – a methodology to unite flyway-scale bird ringing efforts on migration connectivity research

Tianhao Zhao (University of Groningen, the Netherlands)

Identifying origins of migratory individuals at non-breeding ranges, and thereby connectivity, is of high importance. Many methodologies have been applied to cope with this task, e.g., bird banding, individual tracking, and stable isotope assignments. However, there have been obstacles on acquiring a population-level dataset with high efficiency, flexibility and accuracy. Here we introduce a methodology developed in the American flyways, the Genoscape. It is based on mapping genomic variation from different geographical breeding populations and developing simplified, high-resolution SNP (single-nucleotide polymorphism) assays to characterize migratory movements and connectivity. Applying this genotyping assay to individuals from non-breeding regions allows us to infer their breeding origins and migration routes. It has been widely conducted on migratory species in North America, revealing population-specific migration routes on more than 20 species, and helped to establish a network among the numerous bird banding schemes along the flyway.

It will be valuable to establish Genoscape projects among migratory species in Asia to facilitate the knowledge accumulation on landbird migration, as well connecting bird banding organizations among different countries and regions. Here we provide an ongoing example on the common stonechat complex (previously known as *Saxicola torquata*). It comprises small passerine insectivores distributed over Asia, Europe, and Africa. Across their range, stonechats show similar appearances and habitat preferences yet differ widely in migratory patterns and breeding altitudes. So far, it has been difficult to understand how different geographical breeding populations migrate. In particular, in Eurasia, several different taxa co-occur on their wintering grounds, but display ambiguous phenotypical contrasts for identification. In our project, we have collected tissue samples from 15 geographical breeding populations throughout three continents and conducted genome re-sequencing at 15–20X depth. We plan to genotype unknown individuals using low-coverage sequencing from feather samples, which can be collected among different ringing stations all over Asia.

## 東アジアにおける鳥類標識調査の交流

### ○尾崎清明(山階鳥類研究所)

東アジア地域では、1960年代に米軍の移動動物病理学調査(MAPS)で、14ヶ国において大規模な鳥類標識調査が実施されたが、1970年に終了してから調査を継続した国は、日本以外ほとんど無かった。そんな中1981年に日中渡り鳥保護協定が結ばれて、中国では標識調査が開始された。1990年代には、環境庁や文部省のODA事業や民間の助成金を活用し、山階鳥類研究所と日本のバンダーが中心となって、東アジア諸国に出かけての標識調査の講習会を開催し、調査の紹介・普及に努めてきた。また、1997年からは日本鳥類標識協会が参加者を募って、ロシア(カムチャツカ、サハリン)、韓国、台湾、ベトナムなどで共同調査を実施した。

一方、関連する調査者を日本に招聘しての研修が行われた。それらの結果、中国、モンゴル、ベトナム、タイ、インドネシア、マレーシア(サバ州)では標識調査が開始したり、活発化する成果が見られ、一部では標識回収記録も増加している。調査者を招聘しての実技研修は、福島潟を中心とした、環境省の鳥類観測ステーションが活用された。福島潟ステーションでは上記のODA研修を含み、1979年から2024年の46年間で、世界20ヶ国から76名が訪れて、標識調査の実習、共同研究を行ってきた。しかし2002年にODA事業が終了して以降は、東アジア諸国からの参加は減っており、今後、研修の継続とさらなる強化が求められている。

これら、日本と東アジアとの標識調査の交流については、それぞれ個別にレポート等に報告されているものの、全体が分かる形でまとめられていない。今回はそれらを俯瞰する形でとりまとめるとともに、一部の国の現状を紹介して、今後の交流の参考としたい。

◎発表 ○対面 ●オンライン ー不参加

参加者氏名	都道府県	シンボ	大会	懇親会	主な調査地	主な対象種	興味がある事項
あ 青木 大輔	茨城県	◎	ー	ー			
阿子島 大輔	千葉県	○	○	○	神栖	オオセッカ	羽毛の構造
足利 直哉	秋田県	○	○	ー	大瀧草原・岩木川	オオセッカ・シマセニュー	標識過去データの活用
熱田 寛子	東京都	○	○	○			
安部 亮佑	埼玉県	●	●	ー	石川加賀・多摩川	クロジ・サコウチョウ	
安藤 温子	茨城県	◎	○	○	伊豆諸島・つくば市	カラスバト・島嶼鳥類	島嶼進化・種子散布
飯塚 彩子	千葉県	●	●	ー	三番瀬・谷津干潟	シギ・チドリ	シギチ繁殖地・越冬地
池上 隆之	大阪府	○	○	○	和歌山西山・貴志川	ホオジロ類・ヒタキ類	渡り追跡・識別
市川 洋子	群馬県	●	●	ー			
市原 晨太郎	北海道	●	●	ー	北海道		系統・換羽・渡り・繁殖
伊藤 一喜	長崎県	●	●	ー	佐世保	ヒタキ類・ホジロ類・カ類	識別全般
稲村 優一	千葉県	○	ー	○	利根川流域	シギチドリ類・ハト類	鳥類の移動・寿命
今井 菜摘	北海道	●	●	ー	札幌市西区		
今村 知子	茨城県	●	●	ー			
Wieland Heim	ドイツ	◎	○	○			
上田 明子	埼玉県	○	○	○			
上田 恵介	埼玉県	○	○	○	東松山・屋久島	ヤマガラ・メジロ・シジュウカラ	鳥学全般
上原 勇一郎	山口県	●	●	ー			
大河原 恭祐	石川県	◎	ー	○			
大槻 恒介	長崎県	○	◎	○	諫早干拓・野母崎	ヒクイナ・センニュウ類	換羽パターンと時期
岡本 美香	新潟県	●	ー	ー	新潟関屋海岸林	メジロ・アオジ・ツグミ類	
小川 博	千葉県	○	ー	○			
奥山 正樹	東京都	○	○	○	現在は未定	ウズラ・ライチョウ・ウトリ	保護地域や保全
尾崎 清明	茨城県	○	◎	○	沖縄・新潟	アジサシ類・ホジロ類	渡り・保全・捕獲技術
小田谷 嘉弥	千葉県	○	◎	○	野田・菅生沼・神栖	ジシギ・ヤマガキ・タマガキ	換羽と渡りの進化
か 片岡 宣彦	兵庫県	○	○	○	円山川・アンパル	コシアカツバメ・シマセン	渡りルート・換羽
鎌田 咲来	千葉県	○	●	ー			
亀谷 辰朗	千葉県	○	○	○	葛西橋・風蓮湖st	ハクセキレイ	移動・分類・学名和名
刈田 斉	和歌山県	●	●	ー			
狩野 清貴	東京都	○	○	○	京都府・福井県	オオミズナギドリ・ノゾコ	
川合 正晃	静岡県	●	●	ー	天竜川	オオムシクイ・コムシクイ	
川路 則友	北海道	●	●	ー	札幌・羊ヶ丘	ヤブサメ・クワガタミシクイ	繁殖鳥モニタリング (MAPSJ)
河原 孝行	東京都	●	○	ー	菅生沼・羊ヶ丘	オオジュリン・クワガ	羽衣の種内の多様性
菊池 博	神奈川県	○	○	○	神奈川・宮崎	ツリスガラ・センニュウ類	捕獲方法
北川 捷康	静岡県	●	◎	ー	静岡西部	クロジ・ソウシチョウ・アジサシ	
金 京純	鳥取県	●	ー	ー			
久下 直哉	大阪府	○	○	○	十三干潟・六甲山	オオジュリン・マミジロ	バンド-連携・渡り解明
熊井 琢人	神奈川県	○	●	○	相模川・東農大厚木	アオジ・シジュウカラ・メジロ	
熊代 直生	大阪府	○	○	○	大阪・和歌山	ムシクイ類	分布の変化
黒田 治男	兵庫県	●	●	ー	長野県・札幌	ムシクイ類・ホソシシクイ	鳴りの地理的変異
古園 由香	奈良県	○	○	○	大阪穂谷	ルリビタキ・ミズゴイ	モニタリング・保護
小西 広視	鳥取県	○	○	○	千代川・神西湖	シマセニュー・シベリアジュリン	
小林 さやか	千葉県	○	○	○	皇居		標本や鳥類学者の歴史
米田 重玄	千葉県	○	○	○			
小山 和美	埼玉県	○	○	○	東松山・三番瀬	里山街中の小鳥・シギ類	再エネの生態系破壊



◎発表 ○対面 ●オンライン —不参加

参加者氏名	都道府県	シンボ	大会	懇親会	主な調査地	主な対象種	興味がある事項
小山 正人	埼玉県	○	○	○	石狩・埼玉比企	アカモズ・オオジシギ・チュウビ	再エネ問題・傷病鳥
今野 紀昭	神奈川県	○	○	○			標識調査に関わる情報
さ 齋藤 勝義	神奈川県	○	○	○	相模川		
齋藤 武馬	東京都	○	○	○		ムシクイ類・カワセミ	
齋藤 安行	茨城県	●	●	—	大潟草原	シマセンニュウ・ノゴマ	換羽・性齢識別ガイド
作山 宗樹	岩手県	●	●	—	雫石川・岩木川	オオセッカ・ノジコ	渡り・地域性・進化
佐藤 達夫	千葉県	○	○	○	行徳・九十九里	コアジサシ・シロドリ・サギ	
佐藤 理夫	北海道	●	●	—	函館山・松前町白神	ルリビタキ	ルリビタキ渡り齢査定
澤 祐介	東京都	◎	○	○	野付湾・織田山	ガン類・ユリカモメ	
重岡 昌子	東京都	●	●	—	八王子・みなかみ町	ヤマガラ・イヌシ・カカラス	
清水 敏弘	愛知県	●	●	—			
須川 恒	京都府	○	◎	○	宇治川・昆陽池	ツバメ・カワウ・ユリカモメ	渡鳥・湿地・国際協力
鈴木 明子	広島県	●	●	—			渡り・保全
鈴木 仁	鳥取県	○	○	○	美保関・鳥取	センニュウ類・ツグミ類	耕作放棄地の利用状況
千田 万里子	東京都	○	○	—			
惣田 彩可	京都府	●	●	—	京大芦生研究林	ミソサザイ	性判定
た 高岡 奏多	新潟県	○	●	—		モズ類	
高木 憲太郎	東京都	●	○	—			
高橋 和也	宮城県	●	●	—			
田川 之彦	大阪府	●	●	—	和歌山	ヨタカ	捕獲方法
竹田 山原楽	宮城県	○	○	○	鳥の海・東北大川内	アオバズク	渡りの行動学・生理学
田谷 昌仁	宮城県	○	◎	○	鳥の海・名取川	シギチドリ・フクロ類	進化・生態
田仲 謙介	神奈川県	○	○	○			
田中 智	滋賀県	○	○	○	滋賀西の湖	湿地棲小鳥類	換羽
田中 忠	熊本県	●	—	—			
玉田 克巳	北海道	●	●	—	野幌森林公園	スズメ・アオジ・ハシブトガラ	分布・生息環境・増減
手井 修三	石川県	●	●	—	金沢市	ホオジロ・モズ類	
寺嶋 太輝	東京都	○	○	○	祇苗島・菅生沼	ウミツバメ類	ウミツバメの生態
寺島 正彦	長崎県	●	●	—	諫早市	オオジュリン等	
天豪 趙	東京都	○	◎	○	青海省・モンゴル	ノゴマ・ノビタキ	個体追跡・性齢識別
富川 徹	北海道	●	●	—	野幌森公・宮島沼	クロツグミ・クマゲラ	小型発信器
鳥飼 久裕	鹿児島県	○	◎	○	奄美大島・沖縄島	アマヤマシギ・リュウキュウシギ	
な 中辻 百合子	千葉県	○	○	○	神栖	ハシボソガラス	カラスの貝落とし
中野 晃生	東京都	○	○	—	三宅島	アカコッコ・イヅナシギ	
仲村 昇	神奈川県	○	○	○	福島北部・横浜	ブッポウソウ・キヌメ	捕獲困難種の捕獲方法
中山 文仁	東京都	○	—	○			
西 教生	長野県	○	○	○	長野県・三重県	イワツバメ・ホシガラス	
は 博多屋 汐美	沖縄県	●	●	—			
橋本 宣弘	福岡県	●	●	—		シギチドリ類	
長谷川 絵美	京都府	●	●	—		ツバメ類・ガンカモ類	渡り・経験環境の復元
花輪 万智	茨城県	●	●	—			
原島 政巳	千葉県	○	○	○			
日比野 政彦	広島県	○	○	○	広島・島根益田	ツバメ・越冬小鳥類	調査継続・モニタリング
平岡 考	千葉県	○	○	○	手賀沼	ヨシゴイ	
深井 宣男	群馬県	●	◎	—	渡良瀬	ヨタカ・フクロ類・トク	識別ガイド・捕獲方法

◎発表 ○対面 ●オンライン ー不参加

参加者氏名	都道府県	シンボ	大会	懇親会	主な調査地	主な対象種	興味がある事項
深井 真紀	群馬県	ー	○	ー		コルリ・アハト・アハスク	
深谷 治	島根県	●	●	ー			
星野(森) 由美子	島根県	○	○	○	三瓶山・斐伊川	アカショウビン・カラアカハラ	捕獲シバリアアジの識別
細谷 淳	宮城県	○	◎	○	鳥の海・名取川	シギチドリ・フクロウ類	移動・食性・進化・保全
堀田 昌伸	長野県	●	●	ー	爺ヶ岳・茶臼岳	ライチョウ・ヒメアマツバメ	
ま 松村 俊幸	福井県	●	●	ー	北潟湖・金沢市	ハヤブサ・ノジコ	繁殖生態・渡り・猛禽
松本 祥子	千葉県	●	○	ー	富山市・富士川町	海鳥類	
間宮 寿頼	富山県	●	●	ー			
水田 拓	千葉県	○	○	○	奄美大島・我孫子	オトラツグミ・アマミヤシキ	行動・生態・保全
水村 春香	山梨県	○	◎	○	富士山	モズ類・ヨタカ	
宮澤 小春	大阪府	●	ー	ー		カラ類	生物地理学・各地リスト
村尾 裕美	福岡県	●	●	ー	福岡志摩小金丸	メボソムシクイ上種	捕獲時の声は識別点？
村上 正志	新潟県	○	○	○	福島潟・佐渡		渡りの説明
村上 真由美	新潟県	○	○	○	福島潟・佐渡		識別
村上 亮	兵庫県	●	●	ー	関西国際空港	コアジサシ・フクロウ	
村濱 史郎	大阪府	●	●	ー	大阪河内長野	フクロウ	地域個体群の血縁関係
望月 通人	埼玉県	●	○	ー	神栖	オオセッカ・コジュリン	
望月 みずき	埼玉県	●	○	ー			
森 香織	大阪府	●	●	ー	大阪府、和歌山県		
森 茂晃	島根県	●	●	ー	斐伊川河口	コヨシキリ・センニュウ類	秋季シバリアアジの識別
森本 元	東京都	○	○	ー			
森本 ユキ子	東京都	○	○	ー			
や 安田 和真	茨城県	●	●	ー			
山口 雅生	長崎県	●	●	ー	島原	シロハラ・ルリビタキ	越冬個体数の年変動
山根 みどり	兵庫県	○	○	○	宝塚市内	エゾセンニュウ	恐竜からの進化の過程
山本 敏夫	石川県	●	●	ー			
山本 裕	東京都	○	○	○	多摩川・三宅島	シジュウカラ・アカコッコ	
吉田 一朗	福井県	●	●	ー	織田山st・中池見	ノジコ・ヨシキリ・センニュウ類	耕作放棄・湿地・巣箱
吉田 邦雄	栃木県	●	●	ー			
吉田 保志子	茨城県	●	●	ー			
吉田 美里	大阪府	●	●	ー	和歌山・大阪	ヒタキ類・モズ・ウズラ	保護・保全への寄与
吉丸 博志	茨城県	●	○	ー	茨城・菅生調整池		
吉安 京子	千葉県	○	○	○	岡山市・倉敷市	小鳥類	講習会・実技講師制度
米山 富和	長野県	○	◎	○	長野飯田川路	河川敷小鳥・ジョウビトビ	国内繁殖ジョウビトビ季節移動
わ 脇坂 啓子	京都府	○	◎	ー	巨椋干拓・宇治川	ケリ・イカルドリ・カルガモ	繁殖生態・GPS・色足環
脇坂 英弥	京都府	○	◎	ー	巨椋干拓・宇治川	ケリ・タガリ・タマシキ	繁殖生態・GPS・色足環

## 2024 年度(第 38 回)日本鳥類標識協会大会 東京大会講演要旨集

編集・発行：2024 年度（第 38 回）日本鳥類標識協会全国大会 東京大会実行委員会

水田 拓（実行委員長）、浅井芝樹、岩見恭子、小川 博、尾崎清明、小田谷嘉弥、小林さやか、齋藤武馬、澤 祐介、神保里香、千田万里子、田谷昌仁、富田直樹、仲村昇、平岡 考、深井宣男、水村春香、望月みずき、森本 元、山岡容子、油田照秋  
千葉県我孫子市高野山 115 （公財）山階鳥類研究所保全研究室気付

発行日：2024 年 11 月 23 日

表紙イラスト：横山幸奈